

Crisis（クライシス）緊急無線を聞き逃せば捕虜の憂き目

岩本友則

8月に入り私のイラクにおける任務が終わろうとした時、国連とイラク政府との間で緊張関係に陥りました。そんな中、バグダッドのショッピング街（カラータ）にロケット弾が打ち込まれた事件があったそうです。（私たちには分かりませんでした、帰国後、その事実を知りました。）多分このような状況から私たちは、観光等でバグダッドから外にでることは禁止されたのです。そして、国連事務所前には世界中のマスコミ関係者が取材に来ていました。不思議なことに日本のマスコミ関係者は、誰も来ていませんでした。

1. 避けられるか捕虜の憂き目（緊急待避の準備）

私のチームでも、チーフ査察官の判断により具体的に緊急待避の準備をしました。緊急待避の手順確認、査察データの持出し手順や役割分担、集合場所、イラク国外への退避ルート等細かく緊急退避の準備をしたのです。何時如何なる時でも緊急退避が迅速に出来るよう個人の荷物は、全部事務所に置き、夜寝るためにホテルに帰る都度、必要な物だけを持ち出すなど、何時待避命令が出されても対応できるようにしたのです。

トランシーバーを通じて避難命令が出されます。その無線を聞き逃したら貴方は、イラクのゲスト（you will be Iraq's guest）、即ち捕虜になるとの注意を受けたのです。

緊急退避命令は、トランシーバーを通して連絡が来るとのことから、捕虜にならないため、ホテルで眠りにつくときには枕元にトランシーバーを置き、電池を交換し、緊急退避命令に備えたのです。朝起きるとトランシーバーの電池があること、ホテルの駐車場に私たちの車があることを確認し、ああ良かった。取り残されていなかったと胸をなで下ろすのです。

こうした緊張した日々は、私が帰る時まで続いたのです。私は、滞在期間が終わったことにより、この緊張から解放されましたが、残った査察官達は、更に続いたのです。



2. 私達は、まるで映画スター（事務所前には、世界のメディアが）

8月6日以降バグダッドの事務所前には、連日、世界のマスコミ関係者が押し掛けてきました。そして、私達が、査察のために事務所を出ようものなら、たちまち取り囲まれ、カメラとマイクを向けられ今日は、何処に査察に行くのか？査察は妨害されないで出来るのか？今までと変わったことはないのか？・・・とにかく矢継ぎ早に質問を浴びせかけられたのです。こうしてマスコミ関係者に連日囲まれてみると芸能人の苦勞が少し分かった気がします。また、私達の査察に出かけていく様子や、査察機材を積み込む様子がCNNニュースで連日放送されたのです。UNSCOM(大量破壊兵器

廃棄特別委員会)の査察官達は、自分の姿がニュース映像に映し出されると、まるで自分がスターにでもなったようだと言いつつテレビを見ながら大騒ぎです。私も、この期間4回ほどニュースに映し出されました。多分、日本では放送されなかったと思います。

世界中から多くのマスコミ関係者が事務所前に来ていたのですが、日本人が居ればすぐ分かるのですが、日本人のマスコミ関係者に会うことはありませんでした。しかし、日本に帰ってみて驚いた事に、この期間に係わる新聞記事が数多くあるではありませんか！ 現地に取材に行かなくて新聞記事が書けるものだと呆れたものです。

3. 世界から問われる日本の国際貢献

日本は、戦争には参加しなかったものの湾岸戦争に多くの国家予算を支援のために使い、また、UNSCOMの査察活動のために、金銭的支援及び活動に使う4輪駆動車(写真)の大半を提供してい



たにも関わらず日本人が活動に参加していないことから日本に対する批判について「11_核査察の合間で余暇の過ごし方」で紹介しましたが、日本の国際貢献の在り方が国際社会から問われているのです。

日本は、自衛隊の海外派遣も含め危険(リスク)が無い所に派遣するなどと言っています。しかし、残念ながら国際貢献には危険がつきものであることを理解しなければなりません。

「15_マスコミ報道・妻の覚悟」で述べたタジキスタンに派遣された秋野先生の痛ましい事件、また、私がイラクに滞在中、ナンシーと言う36歳のフランス人女性が、国に二人の幼い子を残したまま突然死んでしまいました。あつと言う間の出来事で、前の日に身体の調子が悪いと言ってホテルに帰り、次の日の朝にはもう死んで

いたそうです。ナンシーは、UNSCOMの所属ではなく、ワールドフードプログラム(イラクが石油を売ったお金が、武器購入に使われることなく食べ物や医療に限って使われるために監視及び経理処理をする国連機関)の一員で、私たちと同じ建物の中に事務所がありました。ですから、同じ建物で働いていた全ての国連組織の人々による葬式が行われたのです。

私たちの事務所は、24時間イラク兵によって守られていました。しかし、いざとなれば、イラク兵の銃口は、我々の方に向くであろうことを誰もが覚悟しています。この様な場で仕事に携わる場合、リスク「ゼロ」などあり得ないのです。

ヨーロッパの幾つかの国は、イラクに派遣するために、リスクがあるという前提で、参加する人には、国連からの日当(100ドル/日)とは別に、リスクを補うため、かなりの額の補助を出して、適切な人材をイラクの国連組織に派遣していました。

一方、ロシアとか中国は、現金でドルが支払われることから、リスクを差し引いても有り余るメリットがある事から、参加希望者が非常に多く競争率が激しいそうです。ちなみに、日本はありません。

総務を担当していたニュージーランドは、物資管理や資材の運搬のため多くの大学生をバグダットの国連事務所に派遣していました。私は、こうした大学生達とも交流しました。彼らにとってこのような場は、掛け替えのない学びの場であると感じたのです。日本の様に多額のお金を出しても人が行かなければ、国際社会から非難の的となり、社会勉強のために若者を派遣し現地で活動する事により人の目には、それが、その国の国際貢献として映るのです。

4. 日本政府より怒りの電話

その当時イラクは、経済制裁を受けていたこともあり、ホテルから海外に電話することなど出来ません通信手段は、国連の事務所から衛星回線を使って家族だけに電話することが出来ました。当然インターネットはセキュリティの観点から出来ません。

緊張関係に陥ったことを踏まえ、私の安否を心配した日本政府は、国連のバグダッド事務所に連絡を取ったのです。電話があった時、私は査察に出かけていて留守でした。至急電話するよとの伝言が残されていました。これには、困りました。なぜならば、イラクの査察活動に参加するにあたり、国際原子力機関（IAEA）との契約の中に任務中は、日本政府、所属する組織等へは、連絡を取ってはならないとの一文があったからです。電話をしようものなら、電話番号が記録されますので、直ぐ私が規則を破ったことが分かっしまいます。仕方がないので、その伝言を、核査察チームの責任者に見せて、電話して良いものか確認したのです。そして、もし電話の内容を確認する必要があるのなら、英語で会話することも告げたのですが、答えは、OKで、日本語で良いとのこと。

了解を取って、日本政府に電話すると、いきなり怒られたのです。それは、「皆が心配しているのに、何故電話一つしてこない。」と言うのです。これに対し、電話出来ない事情を説明し、特に、危険な目に遭うことなく査察活動を続けていること告げたのです。この電話は、感謝である反面、少し失望感もありました。それは、イラクに派遣されるにあたり、IAEAとの契約に係る書類は、全て日本政府経由で私の所に送られて来ていたのですが、契約は私個人と契約ですから目を通されていなかったのですね。

続く